

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅤ -最期の時-』

高名祐美

父が亡くなって二度目のお盆を迎えた。お墓への納骨のことで、妹と話し合う。わたしのお寺で、永代供養をしてその後に納骨しようとした。その後、妹家族と私たち夫婦で会食する。家族が集まって、お酒を飲むのが大好きだった父。そんな父の思い出を妹家族と話し合おうと思う。

23日は父の月命日。朝仕事前に実家へ行き、夫と一緒に参りする。父の遺影が私達を見つめてくれている。「みんななかよく。家を守ってほしい」という父の言葉を思い出して、妹家族と談笑する。忙しい毎日のなかで、なんだかほっこりするひととき。父の姿はないけれど、そこで私達を見守っていてくれるように思う。

#### Ⅳ 最期 そのとき

令和5年5月23日（火）午前9時。仕事前に父の様子をうかがいに実家へ行く。昨夜はとても苦しんでいたのが気になっていた。父のそばには、すでに訪問看護師が来てくれていた。朝、苦しそうにしていたので、訪問看護ステーションへ電話を入れて早めにきてもらったと甥から聞く。父の状態をひととおり観察したあと、ナースがわたしと妹を廊下へ促した。「血圧がはかれません。もうすぐお別れがくると思います」と硬い表情で私達に告げる。いよいよ父が最期のときを迎えようとしているのだとわかった。妹も覚悟はできてきていたのか、その言葉にひどく動揺した様子はみられなかった。ナースの言葉を聴き、自分がどうしたらよいか考えた。

「そばについていたほうがいいですね」とナースに問いかけると「そのほうが良いと思います」と。そうだ、父のそばにしよう、いなければ。そう思ったわたしは、一度職場へ行き管理者に事情を説明し、仕事は休ませてもらうことにした。仕事の段取りをすませて再び実家へ。妹と甥が父のそばに座っている。妹の夫も知らせを聞いて、会社を早退してきた。いよいよなのだそれぞれが覚悟をする。昨夜のような苦しみはないが、だんだんと呼吸が弱くなってきた。声を出すこともない。昨日は娘の名前を何度も呼んでいたのに。脈は頸動脈しか測れない。何度も何度もはかってきた酸素濃度はもう測れない・・・

16時。訪問看護師が訪問。よりいっそう呼吸が弱くなってきて、脈も弱いことを確認する。「変化があったり、不安になったら、いつでも電話連絡してくだ

さいね」との言葉に、勇気づけられる。

ナースが帰ったあと、17時すぎから顔で呼吸をするようになった。「努力用呼吸」の状態である。17時15分には下顎呼吸となった。妹に「多分もうすぐ」と伝える。妹は夕食の準備をしていたが、すぐに父の部屋へ来て様子を確認。そして夕食を早くすませようと夫・息子にも伝えた。わたしの長女（孫）が仕事帰りに来てくれたので、そばに居てもらい、みんなで急いで夕食をすませる。だんだんと呼吸の間隔があいてきた。手足が紫色になり、冷たくなってきた。弱くなる呼吸と脈。わたしは首に手をあて脈を聴き、妹は右手、妹の夫は左手を、わたしの娘は足をさすって、みんなが父を囲んで父の身体に触れていた。息が止まりそうだったそのとき、お風呂から急いで出てきた甥が「じいちゃん！」と声をかけた。その瞬間、小さく頷き最期の呼吸をしたようだった。そうわたしには見えた。そしてそのあと顎は動かなくなった。脈もふれなくなった。18時27分だった。

不思議と冷静だった。誰もとりみだすこともなかった。

私　　：看護師さんに連絡するね。

妹　　：うん。お願い。

私　　：（訪問看護ステーションに電話）三輪吉雄の家族です。たった今呼吸が止まりました。

ナース：わかりました。すぐに伺います。先生にも連絡します。

私　　：よろしくお願いします。

（妹に）すぐに来てくれるって。

妹　　：わかった。

19時15分。訪問看護師2名と担当ケアマネさんが来てくれた。少しあとに担当医の先生。死亡確認の時刻は19時22分だった。旅立ちの衣装は、妹と相談して燕尾服を選んだ。中学校の教諭だった父は、校長として卒業式には燕尾服を着ていた。父の「人間の卒業式」。その衣装は燕尾服しかないと思った。

訪問看護師・ケアマネさんが父に着せてくれた。「よしおさん、お似合いですね」と声かけながら・・・靴下は甥がはかせる。「僕、いつもじいちゃんに靴下はかしてもらったな」と、じいちゃんに声掛けながらはかせてくれた。ネクタイは妹の夫が結ぶ。「お義父さん、これでいいかな」。

自宅で最期を迎えた父。「ACP」（人生会議）を父と話題にすることはなかった。もしものときにどうしたいか、そんな話をする必要があるのかもしれない。しかし、きっと父は満足してくれていると思う。わたしたち家族は、父と

1ヶ月家で過ごすことができたことに後悔はないのだから。「おまえらがそれでいいのなら、よかったぞ」という父の言葉が聞こえてくる。いつも誰かがそばにいた。多くの人に愛情を注いできた父は、最後に沢山の人からあたたかいケアを受けられたのだと思う。

父が教えてくれたこと。

人間は死ぬその瞬間まで生きるとのこと。「死にゆく」ではなく「生ききる」のだと。

家族を思い、愛すること。

人を人として尊厳すること、そして感謝の言葉を伝えること。

家族を集めて「みんな仲良くして。家を守って欲しい」と必死に伝えた父。その言葉どおりに私はこれから生きていこうと思う。